



Data

監督: タカハタ秀太
 脚本: 藤井清美/タカハタ秀太
 原作: 佐藤正午『鳩の撃退法』(小学館刊)
 出演: 藤原竜也/土屋太鳳/風間俊介/西野七瀬/佐津川愛美/桜井ユキ/柿澤勇人/駿河太郎/浜野謙太/岩松了/村上淳/坂井真紀/濱田岳/ミッキー・カーチス/リリー・フランキー/豊川悦司

■■■ショートコメント■■■

◆『キネマ旬報9月下旬特別号』の「REVIEW 日本映画&外国映画」では、ある1人から「冒頭のシーンからひたすらセリフが薄ら寒く、回想ショットで説明を重ねれば重ねるほどリズムはもたつく」と書かれ、星1つ。もう1人は、星3つだが、その評価はボロクソだ。

「映像化不可能」と言われた直木賞作家・佐藤正午の名作が、まさかの実写化！それが本作の謳い文句だが、この低評価はなぜ？

◆主人公は、かつて直木賞を受賞した作家・津田伸一（藤原竜也）。そんな設定は少し嫌味だが、主人公はなぜ今、富山市内のデリヘル嬢の送迎ドライバーまで身を落としているの？ そんな津田役を、美男子の代表のような藤原竜也が演じる意外性は買うものの、「作家とは何か？」を考えるについて、本作の津田が語る哲学には大いに疑問がある。

ここまで落ちぶれても、俺が今書いている小説はあくまでフィクション。彼は編集者の鳥飼なほみ（土屋太鳳）に対して、再三そう力説していたが・・・。

◆『鳩の撃退法』というタイトルは全く意味不明。本作は、沼本（西野七瀬）がバイトをしているコーヒーショップで、『ピーターパンとウェンディ』を読んでいた津田が、別の席で1人本を読んでいた幸地秀吉（風間俊介）に話しかけるところから本格的なストーリーが始まっていく。そこに至るまでの1つ1つのストーリーも、それ以降の1つ1つのストーリーも、それぞれそれなりの合理性はあるのだが、どれもこれも少しずつ変。登場人物も多岐にわたるから、そのキャラやストーリーを追っていくだけでも大変だが、1つ1つのストーリーのつながりは説明されないから、観客は全体像が全くつかめない。

もちろん、本作はそれが狙いなのだが、それらのストーリーを物語っている（書いている？）津田はそれが分かっているの？ どうも、そうではないらしい。そのことが、少しずつ見えてくると・・・？そしてまた、「事実は小説よりも奇なり」の格言(?)を思い出し

てくと・・・。

◆チラシでの本作の謳い文句は、「この男が書いた小説(ウソ)は、現実(ホント)になる。」、「この男が書いた小説(ウソ)を見破れるか。」だが、これを節目節目の回想シーンで説明されると、思わずシラーとなるのは私だけ？

“鳩”といえば、どうしても2009年の自公連立政権から民主党政権への交代で生まれた鳩山由紀夫総理を思い出す。また、鳩といえば、平和の象徴(使者)というイメージが強いが、本作の鳩はそれとは全然違うので、それに注目。しかし、そんなネタでニセ札事件のストーリーを作っているの？

他方、本作では本の葉の代わりに津田が1万円札を使っているのがミソだが、あんなに金に困っている男がなぜそんな習慣を？それは誰がどう考えても変だ。また、ニセ札騒動勃発に津田が驚かされたのは当然だが、本作に見る300万円の札束のチェックはいくら何でも変！

◆本作は、たくさんの小さなストーリーから構成されており、最後にそれが1本につながるわけだが、本作後半から登場してくる倉田健次郎(豊川悦司)は誇張し過ぎて、あまりに不自然。前半では、“都市伝説”と言われるほど、裏社会を牛耳るドンとして“隠然たる力を持つ陰の男”のイメージを徹底させているのに、後半ではあまりにその姿をさらけ出し過ぎるのでは？

パンフレットには、「注：この物語はフィクションです。実在の人物や団体とは関係ありません。僕、津田伸一以外は。」のオチがついているし、119分すべてを疑った後の映画のオチとしてもなるほど、と納得だが、映画そのものの出来はさて・・・？

2021(令和3)年9月8日記